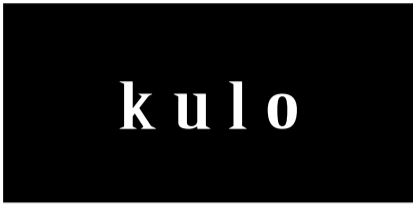


The Akita University Post

Wednesday, March 4, 2009 第7号



発行 AUP 秋田大学報道局
主筆 三宅朝子
編集デスク 田代周祐



aulsf@hotmail.co.jp

AULSF



国際交流サークルPICA

秋田と世界の架け橋へ

2月11日、国際交流会館にて今年度最後となるPICAが開催された。会場である、秋田市手形の国際交流会館では、日本人学生とアジア圏の留学生が楽

しく談笑をしている様子が多くみられ、あまり接点のない留学生と、日本人学生の交流の機会作りの一翼を担っていることを強く印象付けられることとなった。

PICAの始まり

PICAは、昨年の秋から現在まで、計5回に渡って活動が行われてきた。「もつと留学生の人たちと英語で触れ合う機会を設けるべき

だ。」英語について研究を行う、PICA代表の草薙邦広さんが言われたある教授の言葉である。これをきっかけに留学生との懸け橋となるべく、草薙さんを中心に動き始めたのだ。立ち上げにあたっては、

テリー・リー・ナガハシ教授とタッグを組み、共に広報宣伝・企画作りを行っていった。中にはテリー教授の授業の1環として開催されることもあり、結果として教育文化学部の学生を中心に認知されることとなった。

拡がっていく、

PICAの輪

今回のテーマは、バレンタイン目前ということもあり、『メッセージカード作り』。それぞれが趣向を凝らしたカード作りを行い、その中でも留学生と共に作業を行う様子が見られた。カード作りが終わると、今度はカード交換の時間。それぞれのカードにこめられた想いを交換することで、更なる心の交流を図ることができたようである。また今回は医学科から参加する学生の姿も見られ、徐々に輪が広がっていることを感じさせられる。

来年度へ向け

一方、回を重ねることに慣れてくる課題もある。「開始当初は話すことを中心に、文化的違いに気づいてもらうことで、各々の意見を促すことができた。しかし、そればかり続けるとマンネリ化を引き起こす。共にものづくりをするなど、ノンバーバル・コミュニケーションを通して、更なる人間関係の形成を図っていきたい」と代表。来年度の開催に向けて、更なるステップへと進もうとしている。後輩へと世代交代で草薙さんは代表を退くが、今後も多くの生徒を巻き込んで、更なる発展を期待したい。(田代周祐)

メッセージカード作りの様子。多くの留学生が集まった。(=秋田大学国際交流会館にて)

學貴日新

▼「春は出会いと別れの季節」幼い頃、教科書で読んだ、私の忘れられない一節である。春の「別れ」という経験が大嫌いな私にとって、「出会い」の季節でもあるというのにはある種、斬新な考え方だった▼高校の頃、卒業の時に、「これから約束をしなきゃ会えなくなる」ということにと、怖くなったことがある。毎日学校で嫌でも顔をあわせていた友人と、明日からは時間と場所を決めなければ会えない。そのことがすごく心細かった▼それでも私は今、秋田という地で新たな仲間と時を刻んでいる。友人も家族も親戚すらいなかったこの街に、今は道端で会えば挨拶を交わし、バイト先には家族のように私を迎え入れてくれる人たちがいる▼「出会い」は何も人だけではない。本や音楽や仕事も出会いである。自分の感情の琴線に触れ、心高ぶる思いを経験したことは誰しももあるだろう。だが今、この出会いに気づかずにいる人があまりに多い気がするのだ▼出会いには点と点の結びつきではない。小川が源流から少しずつ別れてやがて別の川と繋がっていくように、あなたと誰かが繋がることは、さらに新たな出会いへと繋がっている。どんなに無意味に思えるその出会いや経験も、必ず次の何かに出会うための布石であることは間違いのないのだ▼別れのときのあの胸を締め付けるような想いというのは、いくつになっても慣れない不思議な感情である。しかし別れがもし簡単に済まされてしまいう程度の通過点であるならば、我々はきつと出会う喜びを実感することはできないだろう。出会いとは未知の世界への扉を必ず開き、さらにはあなたを豊かにするのだ▼これから私はどれだけの人と別れ、そして出会うのだろうか。春はもう、すぐそこだ。

対談 AUP × 大学 変わる秋田大学!

AUP秋田大学報道局が発足して早半年が過ぎた。主筆も代替わりし新体制となったAUP。秋田大学長に就任して1年がたとうとしている吉村昇学長へ、これまでの成果と今後の秋田大学、また、秋大生に望むことについてお話を伺った。(AUP主筆 三宅朝子、編集デスク 田代周祐)

●就任一年での変化

三宅：昨年の四月、学長に就任されるにあたり、どのような想いを抱かれていま

したか?

吉村：ちょうど就任したのは10カ月ほど前の話ですね。『学習者中心』をモットーに、学

生がどんどん活躍できるように舞台作り。そして、キャンパス内の環境整備に力を入れていきたい、そんな思いでいました。



これから秋田大学はどのように変わっていかなければならないのか。望む学生像とは。(=秋田大学学長室にて)

三宅：そして今まで、目に見えて変わったなと思うようなところはありますか。

吉村：やはり秋田大学報道局を始め、アメフト部の1部リーグ昇格、更には秋田大学元氣プロジェクトなど、徐々に増えつつあるように感じられますね。しかし、まだまだという部分もある。来年度以降は学内でインターンシップが行えるようなシステムを構築することも考えていて。社会に出て活躍できる秋田大学生になつてもううためにも、どんどん経験できる機会を増やしていけたら。

●大学と地域の関わり

三宅：私の周りには秋田大学生が何か活躍しているといった話題をあまり聞かないんですよ。何だか暗いイメージをどうしても持たれるようで。そういった意味でも、もっと盛り上げていけたらいいなと常々考えさせられます。

吉村：秋田大学を通して地域を盛り上げていけたら、というのには強く感じますね。やはり秋大生にはもっと外へ、外へと何かアクションを起こしてもらいたい。たとえば、秋田大学と秋田駅東口の間の道路でお祭りをする。そうやって楽しみながら地域の人を巻き込んでいけたらこれ以上素晴らしいことはない。そういった試みには、喜んでサポートしていきたいと考えていますよ。最近では手形通日も学生が歩かず寂しいようですよ。

●環境設備の充実の重要性

三宅：キャンパス内の環境整備についてはどのように思われますか。

吉村：寮が新しく建てられるのを始め、工学資源3号館の建て替え、教育研究センター



の建設を予定し、研究拠点の充実を図るなど、より学びやすい環境にしていこうと計画しています。

●秋田大学の变化

三宅：また少し離れるのかもしれませんが、冬に手形地区で行われたイルミネーションの評判はどうでしたか。

吉村：なかなか良かったです。あれがきっかけでより良い印象を持つてもらえたらいいですね。来年度は更に大規模なイルミネーションにしようかと検討しています。本道地区でもぜひやってほしい、って話もあるようですよ。

●望む学生像

吉村：秋大生には、そうやってどんどん身の回りのことに興味・関心を持つてもらいたいですね。社会情勢について話をしたりするものですか。

三宅：たまーに話します(笑)。やはり、社会人になるにあたって無関心でもいられないですから。

吉村：そうですね。やはり周りを見回し、今何が起きているのか関心を持つことをぜひしてもらいたい。そして、どんどん議論してもらいたい。どうしても無関心になりがち

な傾向にある。政治にしてもそうですよ。それでは何も生まれません。関心を持ち、どんないろんなことにチャレンジしてもらいたいんですよ。

三宅：つまらないというだけでなく、面白くできるように考えるという思考へとスライドしていけたら理想ですね。それでは最後に、秋大生へ一言よろしくお祈りします。

吉村：とにかくもつと元気をだしてもらいたい。そして何事にもエネルギーに動いてもらいたいですね。そして社会情勢じゃなくてもいい、身の回りのことでもいい。周りを見渡し、考え、議論してもらいたいんです。そうして大学を盛り上げてくれることを期待しています。そのためサポートは手厚くしていきます。(文責・田代周祐)



三宅朝子 MIYAKE Asako 1986年仙台市生まれ。秋田大学教育文化学部国際言語文化課程吹奏楽文化必修3年次在学。AUP主筆。AUP秋田大学報道局文化事業部において別冊kuiloのライターとして執筆後、第二代会長に就任。「今しか出来ないことをする」をモットーとし、様々なことに挑戦する。現在、就職活動真っ最中。



吉村昇 YOSHIMURA Noboru 1943年生まれ。1969年 秋田大学大学院鉱山学研究所修士課程電気工学専攻修了 工学博士(名古屋大学 1974) 2008年 秋田大学長。専門は基礎電気工学(特に電気的環境・エネルギー関連)。主な著書に希少金属データベース(日刊工業新聞社、1999)など。

学生のニーズに合わせた支援を

—教育文化学部 就職情報室—

街を歩くと、着慣れぬスーツに身を包む学生をよく見かけるようになった。年々早期化しているといわれる就職活動もいよいよ今年2月に入り、本格化してきたのだ。そんな学生の活動をサポートしてくれる「教育文化学部就職情報室」を取材した。教育文化学部3号館2階に位置するこの部屋では、村上勝子さんと信太恵子さんの二人の女性が学生の進路についての情報提供や資料の貸出し、相談などをこなしている。教育文化学部の学生は主に、一般企業、公務員、教職など、その進路は様々だ。企業に就職希望の学生



相談に訪れる学生が跡を絶たない室内

には、エントリーシートへの添削や面接練習、公務員や教職希望の学生にはその対策講座を随時開催するなど、それぞれの学生の求めるものに柔軟に対応してくれる。また、秋大を卒業していった先輩方の就職状況も分かり、希望があれば先輩方の確認をとった上で

OB・OG訪問をすることも可能だ。

情報室の懸念と課題

一方で、「ここに来ればなんでも情報が手に入る」と、提供する情報に頼りすぎ、それだけで安心してしまふ学生が増えるのではないかと懸念もある。「時には突き放しているような態度をとってしまふこともあるが、別に不親切でやっているわけではない。自ら動き出す力をつけてほしい、という愛のむちだと思ってください。」と村上さんは微笑む。

より多くの学生が活用を

まだ一度も就職情報室を訪れたことがない学生も多いのではないのだろうか。就職することが人生のゴールではない。けれども、間違いなく将来の自分とつながる進路選択。村上さんや信太さんとおしゃべりするような軽い気持ちでぜひ一度、この部屋のドアをノックしてみたい。(春休み中も平日普段通り開放)

(三宅朝子)



秋田市スポーツ賞受賞

秋田大学柔道部、飛躍の一年

秋田市スポーツ賞の受賞者が発表され、団体で秋田大学柔道部が、個人では、柔道部に所属する飯田哲也さんが優秀賞を受賞した。そこで、主将を務める進藤敬さん(教育文化3年)に、これからの展望についてお話を伺った。(田代周祐)

三戸監督の指導の下

新しく主将に就任した進藤敬さんは、「私たち柔道部は、東北はもちろんのこと全国全ての大学に負けない柔道を目指して練習をしています。」と話す、その言葉とは違わ

ぬ実績を残してきた。全国の国公立大学の頂点を競う、全国国公立大学柔道大会において3位、また強豪ひしめく私立大学が多く出場する、全日本学生柔道大会にも出場するなど、国公立大学の枠組みを超えて戦っていることが分かる。

私立大学よりも

負けない練習量

柔道部に所属する学生は、推薦による入試で柔道を活かして入学したのでなく、学力試験を伴う試験を経て秋田大学に入学している。その点が、強豪の私立大学とは大きく違う点である。高校時代の柔道の実績だけでは、秋田大学柔道部の門を跨げないのだ。主将の進藤さんも、3年前の春に前期入試で合格を決め、柔

道部に入部している。この環境の中で、輝かしい実績を築いてきた原動力は何なのであろうか。それは、豊富な練習量である。3時間の練習を週6回課し、更には朝のランニングやダッシュなどのトレーニングも欠かさない。

主将としての心構え

この春、4年生が卒業すると共に、部員も23名から15名となることから、より個々の意識向上が求められる。「確かに、試合をするのは個人戦であれば1人、団体戦であれば最大で7人である。しかし、

部員全員が勝つためには何をすべきなのか、今まで以上に役割を認識し、盛り上げていかなければならない。」と進藤さんが語る口調には、危機感と責任感がひしひしと伝わってくるようだった。と同時に、自ら先陣を切って盛り上げていかなければならないと考えている。「以前、練習試合の際に緊張感をもたず試合をし、負けたことがあった。その試合を通して、他の部員が何を思うのか、と監督からの叱咤を受けたこともあった。」以来、主将としての自覚を持って柔道部を引っ張っている。



熱のこもった練習風景。その気迫に圧倒される。(=秋田大学武道場にて)

来年度へ向けて

来年度の目標は全国国公立柔道大会優勝、そして全日本学生柔道大会における団体・個人共に上位進出。熱き魂を持つ主将と、確かな指導力を持つ監督の下、秋田大学の歴史に残るような活躍を期待したい。

kulo

kulo企画班

私が仙台から秋田に来て3年になるが、不思議でしようがないことがひとつある。それは、秋田出身の人に仙台から来たことと伝えると、ほぼ100%の人が「なんでまたこんな田舎に来たの」と問うことだ。

では魅力を何か教えてくれ、と請うと、今度は口を揃えて「癌死亡率が日本一、日照率の低さが日本一、それからねえ・・」。これは魅力でもないでもない、ただの不幸自慢である。自分の生まれ育った環境の魅力を他県の人に伝えたくはないのだろうか。他所から来た私だから、物珍しく思っているだけだろうと言われるのであれば、それは心外だ。これだけは言える、私は秋田が好きだ。なぜなら、自分の足で歩いて見て知ろうとしたから。この3年間で主な観光地はまわったし、あまりスポーツの当たらない小さな街にも足を運んだ。地元の

昔から根付く郷土料理も何度も食べ、米所ならはの日本酒の旨さにも驚かされた。伝統的な技の数々を守り続けていると熱い思いを語る方々にもたくさん出会った。

確かにきっかけは、私が他所から来たためにこの街に興味を持ったということがあるかもしれない。けれども、魅力を知らないまま秋田を出ていく学生があまりに多く、本当に惜しいのだ。

我々は今回、雑誌を作るにあたって、首尾一貫して「秋田」を軸にした。うちにこもりがちであると言われる学生が、活発に外へ出て行くように、街のいくつかのカフェを特集し、また県内の食や技や自然の魅力を知ってもらおうと、「秋田遺産」と題した特集も組んだ。

今ここに聞きたい。「あなたは秋田の良さを語れるか」確かに不便な部分は多くあるかもしれない。けれども、便利なものは便利になったらもう後には戻れないのだということ、忘れてほしくないのだ。だからこそ今ある不便ささえも愛していかなければならない。

私は様々な経験を通して、ひとつの答えにたどり着く。それは「地元の人が変わろうとしなければ意味が無い」ということ。

今後この雑誌を読んでくださった皆様、今一度秋田について考えてくださる機会になることを願っている。これから生まれる未来の子供たちのためにも、我々は秋田の魅力を守り続けなければならない。

AUP Photo Library.



この先に何かあるのか——行く意味がある。(報道班 小林 潤)

AUP INFORMATION

秋田大学
教育文化学部
美術科
第56回卒業記念展

日時 2月27日(金)～3月3日(火)
10:00～17:00
(最終日は15:00終了)

場所: 秋田県立美術館

入場無料
問い合わせ先: 教育文化学部総務係
電話: 018-889-2509

平成20年度秋田大学卒業式

日時 3月22日(日)
10:30～

- 【式次第】
- ・学位記授与
- ・学長告辞
- ・代表答辞
- ・留学生代表挨拶等

終了予定時間 11時30分頃

【お願い】

秋田県民会館には駐車場を準備しておりませんので、車での来場はしないでください。近隣の有料駐車場をご利用いただき、会館周囲の路上・公共施設への駐車はしないでください。

問い合わせ先: 秋田大学総務部総務課
電話: 018-889-2207

斎藤 修さん

さいとう おさむ/秋大正門から徒歩2分の場所に位置するロックバー「BLUES ぼうわあはうす」を経営するマスター。40年ほど前からこの場所で秋田大学生の移り変わりを見守ってきた。



「人と違ってなんぼ」。今の学生はキャンパス内では自分を出さないようにしているような気がする。個性をもっともっと出してほしいよ。それでいろんな学生さんうちの店に来てほしいな。ここ最近では昔みたいに朝まで学生に付き合ってた飲み明かすってことがなくなっちゃったから、さびしいんだよね。ここに来れば、学校では教えてくれないこと、いっぱい教えてあげるよ。
(聞き手: 三宅朝子 写真: 市井了)

秋田百聞 1

人と違ってなんぼ

「秋田百聞」は、秋田に縁の深い人々にお話を伺い、秋大生や秋田について考えてもらう今号からの新企画です。

昔の秋大生のイメージはとにかく文化の面で、「前衛的」。音楽や映画、演劇などをみんなやってた。だけど学生ってのは金がないからね、レコードもステレオも買えない。そういう時はうちみたいな店に来てみんなまで朝まで飲んでたよ。
ただ10年ほど前から学生がまったく来なくなった。今の秋大生が何に興味があつて何してんのかさっぱりわからなくなっちゃった。
俺が思うにね、みんなパソコンや携帯を持つようになったでしょ。あれがいけなかったんだよ。
で酒を飲みながら音楽を聴いていろんな話をした。だから店を出すときは絶対に秋大の近くにしようってね。昔はロックとかから生き方を学んだもんだよ。
たんだよなあ。家にいて人に会わなくても済むようになってしまったでしょ。そうするとあたまでつかちになるんだよ。もつといるんなら人に会わなくちゃ。うちの店の客は個性派ぞろいだよ。秋大を巣立っていった人も多い。秋大生だつて言ったら絶対におごってくれる。

一緒に大学新聞を作ませんか？

私たちAUPが、新聞を作り始めて半年以上経った。学生会館におく新聞を持って行って下さる方も増え、徐々に認知度が広がっていきうに感じ、うれしい限りである。私たちは、学生課広報部の力を借りつつ、学生の自主的な活動の一環として新聞を作っている。メンバーは、4年次が抜けた今となっては5人程度だが、企画・取材・執筆・構成・推敲の全てを学生が行っている。また、昨秋行われた大学祭のミス秋田大学



の企画・運営などもAUPの活動の一部であり、徐々に活動の幅を広げている。さて、このように活動している私たちが、今抱えている問題の1つに人員不足がある。1回の新聞作成を4面構成にするとなると、1人1面担当することになる。様々な記事、丁寧な書くためには今以上のメンバーが欲しいところである。
そこで、私たちはこのAUPの新たなメンバーを募集する。条件はただ1つ、秋大生であるということのみ。やる気があれば、工資・教育・医学に関係なく大歓迎である。「我こそは!」と思った方は、AUPのアドレスか学生課まで一報を願う。
また、AUPでは記事の情報も募集中である。自分の所属している研究室・サークル・部活などの話題をぜひAUPにお寄せいただきたい。こちらも、AUPのアドレスか、学生課まで。多くの応募を待っている。(加藤千鳥)

編集後記

AUP、また別冊kuioを制作する上で、取材をするという機会が格段に増えた。初対面の方々とお会いし、話を聞くというのはなかなかできない、貴重な経験である。
取材依頼したカフェから「あなたの文章で、うちの珈琲は美味くも不味くもなる」と電話口で怒られたあの日。記事の内容確認で「間違ったことを書くことはあなた自身の首を絞めることになる」と、専門家の方からのお叱り。情報を提供してくださる側と、それを見る読者。そしてその間に立つ私たち。言葉というものは同じ日本語でもと

ても難しく、間違った印象を与えかねない。そんな中間者としての重要性を身を以て経験することとなった。
先代の主筆市井了が作り上げたAUPは、今号より代替わりをし、装いを新たに出版することになる。
静かにその時を刻み続けていたこの大学に、新しい風が吹き込まれたのだ。時には弱まることも、吹きすさぶこともある。だがその風は、吹き止むことがあつては決してならないのだ。
今後更なる活躍の場を、このAUPを通して行っていくことをここに誓う。未熟な2代目ではあるが、ご協力のほど、宜しく御願います。

広告

AUPでは広告を募集しております。

企業、各種団体、サークルで掲載ご希望の方はAUPまでご一報ください。(※金額要相談)
AUP ☞ :aup@live.jpまで。

環境とは、何かね？



秋田大学 緑を愛する会

*林檎(C)AULSF 2007

AULSF

aulsf@hotmail.co.jp